1970年代後期および80年代アメリカ建築思潮におけるコンテクスト概念
一現代建築におけるコンテクスチュアリズムの研究 その2—

ON THE TRANSITION OF THE CONCEPT OF 'CONTEXT'
IN THE AMERICAN TREND OF ARCHITECTURAL THOUGHT
FROM MID-1970's TO THE END OF 1980's
Study on 'Contextualism' in contemporary architecture Part 2

秋 元 薫*


This research is a trial to make the concept of the 'contextualism', which has been pursued widely in America during the last three decades, clear.

This paper reviews the transition of the concept of 'context' after 1973, and makes the difference between 'contextualism' and other similar concepts clear.

At early 1980's the word 'context' had been in fashion and 'contextualism' had become a generally accepted idea.

But in the 'contextualism' as a generally accepted idea, there were confusion between the concept of 'context' and that of schema so often. In fact, although 'context' and schema differ from each other, but they function mutually and dynamically in process of cognition.

Keywords: context, contextualism, physical context / cultural context, the Cornell School, schema, dynamic view of the concept of 'context'

1. はじめに

前稿において現代アメリカ建築思潮におけるコンテクスト概念の展開を、第1期（1960〜65年）、第2期（1966〜72年）、第3期（1973〜82年）、第4期（1980年以降）の4期に分け、それぞれ第1期と第2期について論じた。

引き続き本稿では、第3期と第4期におけるコンテクスト概念の内容と変遷を明らかにする。そして、現代建築思潮において近接する他の概念との類似点と相違点を検討することにより、コンテクスチュアリズム概念を理論的に位置づけることを目的とする。

2. 第3期（1973〜1982年）：近代主義批判論から反近代主義論への移行期におけるコンテクスト概念

第3期における現代建築論議の関心は、第2期以前のそれが近代主義の教条を崩すことにあるのに対して、むしろ次次のデザイン傾向を示すことへと移った。

こうした中、コーネル派の建築家・理論家は、著作の発表と教育活動を通じて、彼らが名付けた「コンテクスチュアリズム」と一定の設計理論を紹介した。

一方、70年代末以降「ポスト・モダン」という言葉が、実用を中心として世界的に急速に普及した。このポスト・モダン論議を推進したジェンクス（C. Jencks）とスタン（R. Steme）はそれぞれポスト・モダンを規定する中コンテクスチュアリズムという概念を用いられた。

60年代後半から80年代前半にかけて、歴史的環境保全に関する制度が段階的に進み、世界的にも国際的な思潮の形成や制度の整備が相次いでいる。この歴史的環境保全事業による作品紹介の文中にコンテクストの語が用いられた。

2.1. コーネル派の設計思想

1974年、コンテクスチュアリズムの命名者の一人であるコーニー（S. Cohen）は、1971年にシューマッハー（T. Schumacher）が設立したコンテクスチュアリズム概念を補完した。

コーニーは二つの集合住宅（図1-a、ツウィン・パークス・ノースイースト集合住宅（設計：R.マイヤー、1973年）、図1-b、ギルド・ハウス集合住宅（設計：E.ヴェンチュリ、1960〜63年））を比較し、コンテクスト概念には「物理的コンテクスト physical context」と「文化的コンテクスト cultural context」という対照的な二つの水準があることを示した。そして、当時、流行していた「"包括性"（対"排他的性" inclusive vs. exclusive）と呼ばれる批評的態度が文化的コンテクストの水準に偏重していることを指摘し、設計上効果的な方法として、物理的コンテクストを含めた反方
のコンテクストチューリングがあり得ることを示唆した。

ツウィン・パーカス・ノースイースト集合住宅では、敷地内で三つに分離した建物群が、互いに、あるいは隣接地の建物に対して連続または対立しながら、向かってマッスの間に意図的な広場空間を形成している。コーロンは、ここでのコンテクストの水準を「物理的physical」と呼んだ。一方、ギルド・ハウス集合住宅のダグプレーンのれんが壁に上げ下げがついたファサード、敷地周辺の住宅地によくあるのと同じような形態構成として見え、コーロンは、この場合のコンテクストの水準を「文化的cultural」と呼んだのである。

ところで、心理学の理論によれば、人的内面において思考、感情などの過程は、知覚・運動領域を通して外界と接し、交換する。そして「コンテクスト」は、知覚過程において、人的内面にある「スキーム schema」と相関関係にある動的な概念であると言われる。すなわち、観察者が建築形態を「～として」意味づけて「みる」際に、スキームを先駆的に規定されるのでなく、刺激となるコンテクストの影響を受けて選択されていると記述される。このことは、建築を観察するという行為において、知覚される対象としての建築自体の問題とともに、知覚する主体である観察者の心理的関係も必要があるという問題を再認識させることになる。

そしてこの「物理的コンテクスト／文化的コンテクスト」という二項対立は、知覚の水準を表す概念であるといえる。すなわち「物理的コンテクスト」とは、形態を、具象性ないし意味性を捨象した単なるまとまり、あるいは「分手離 segregation」とそれ自身をとめる「ゲシュタルト Gestalt」の水準にある文脈を指す。これに対して「文化的コンテクスト」とは、観察者が建築形態を「みる」際に「～として」意味づけてみるスキームを選択的に成立させ、水準の文脈を指すと考えることができる。

従来、建築におけるコンテクスト概念は、物理的コンテクストの水準を問題とすることが多かった。先のシューマッハは、コンテクステルリズムを、想定した「理想的」においてコンテクストに応じた「変形」を採用する方法として規定した。その後、シューマッハはコンテクステルリズム概念を主とする物理的コンテクストの水準を指して示していた。これに対し、コーロンは、文化的コンテクストという水準を導入し、従来のコンテクスト概念を拡張したのである。

このコーロンの論文が発表された1974年をはば懐として、建築批評においてコンテクストという用語の使用頻度は急増した。
めることができる。

第一は「文脈効果」の認識である。ロウらは「博物館郡市」を現するための手法について、文化人類学者レヴィストロース（Claude Levi Strauss）が未開社会の中に再発見した「野生の思考」である「プリコラージュ」の概念を導入し「コラージュ」にによる美術工作を例として示した（図3, 4）。この「コラージュ」は、ある特定のオブジェクトを慣用とは異なる状況に置き用いる手法である。コラージュされたオブジェクトは、慣用的な意味とともに、作品によって個別した新しい意味をあたえつつあることになる。すなわち、コラージュとは、特定の事象に対して意図的に「多義性」を付与する操作であり、そこには「対概念の共存」という性質が含まれている。これにより、チェンバーが提起した、 arbeidを新しいコンテクストの中に置き用いて新しい意味を発生させる手法に相当するものである。このような観点から「コラージュ」と「慣用を非慣用的に用いる」手法は、その基底に「かたち」の多義性をもってその意味はコンテクストによって決まるという文脈効果の理論があるという点において、実質的に同等の手法として捉えることができる。

第二は「伝統」に対する態度である。チェンバーは「建築の多様性と対立性」（1966年）以来、T.S.エリオット（T.S. Eliot）の詩論を考察してきたが、その根拠にはエリオットの「歴史感覚 historical sense」の概念があった。1919年、エリオットは有名な詩論「伝統と個人の才能」においてこの概念を提起し、美学上の原理として認めた。作家は過去に受容しながら新しいものをつくり、つくられたものは再び既成の全体の中に入り込んで行きながら、既成の伝統の全体を変えてゆく。ならえ、エリオットは伝統自体を限りなく展開してゆくことが個体と伝統との相互関係であると考えたのである。

先述の心理的見地に立てば、この歴史感覚の概念について、作家の内面に形成される伝統というスキームは、常にコンテクストとの相補性において変革されると記述できる。そして、人間の内面にあらわれる描画を経て批判的にさらして改善していくという、ボバーによる批判的合理主義が、同じ立場にあるという説がある。

このように「伝統」を、すでに過ぎ去った死物として否定的にとらえるのではなく、絶えず連続して現代まで生きていっている創作の源泉という色彩をもってとらえる点において、ロウらとチェンバーの理論は共通しているのである。

2.2. 前近代主義としてのポスト・モダン

ロウらの「コラージュ・シティ」刑行に先立つ1977年、ジェンクスは「ポスト・モダンズの建築言語」において、言語をモデルとして、建築の情報伝達機能に重点を置いた建築デザインの理念を提唱した。

ジェンクスは、結果的にエリート主義にかかわる近現代建築は「一つ的 Invariant」な建築であったと批判した。そして、ポスト・モダン建築は「多価的建築 Multivariant Architecture」でなければならないと主張した。このとき、その作例を6つに分類し、その第4のカテゴリーを「アドホッキズム=アーバニズム=コンテクスチュアリズム」名付けたが、その中に核となる都市デザイン理念を含めたのである。

ジェンクスは「アドホッキズム ad hocism」の例にアースキン（R. Erskine）らが行った、多的価値観を尊重した住民参加による建築計画プロセスをあがる「アーバニズム urbanism」の例にキュロ（M. Cullot）、クリエ兄弟（R. Krier, L. Krier）らが主導する都市住民の行動的価値を重視する都市計画論をあげた。アースキンは、バイカーア開発において、地域内の事務所を構え、そこで住民が都市の結びつき、生活様式、近隣関係などの特性を改変させよう、住民参加による計画プロセスを大幅に採用した（図5）。ま、ジェンクスは、70年代の都市開発により破壊が進んだ彼の故郷ル・クサンフルトで典型的に生じた、ヨーロッパ都市の変容に反対し、伝統的なヨーロッパ都市の特質を基調として都市を再建することを主張していた（図6）。
隆盛と獲合しており、対念としてのコンテクスチェリアリズム版は、ジェンクス、スカへのボストン・モダニズム概念に包括されるものとして認識されたともいえる。

第2期に普及したジェンクス、スカらによるボストン・モダニズムの主張は、近代主義批判論の段階にあった第2期までの建築思潮に対して、むしろ「反近代主義」と呼ぶべきものとしてとらえることができる。すなわち建築を意味伝達の媒体としてとらえる立場に偏っていた設計手法としての「対念」と歴史との関係という時代相関の問題としてとらえつつ、「対念」の元になる形態選択の価値標準として、環境利用者である非専門家たちが一般「大衆」の心理過程を重視する立場を強調したのであった。

このためコンテクスト概念は、物理的コンテクストの水準よりもむしろ「文化的コンテクスト」の水準で比重を移して認識されることになった。そこで、それに伴いコンテクスチェリアリズム概念を、建築思想の象徴作用を重視し、環境利用者の既存知識に合致するよう歴史的形態要素の引用手法をもつ「様式論的（stilistic）」な設計態度としてとらえると、通念が形成されたと考えることができる。

3. 第3期（1983年～）：反近代主義論以降

第3期までに、引入を設計手法として用い、対象物となる建築と、周囲の環境の間に「類似性」、「継続性」の関係をつくるとする立場をコンテクスチェリアリズムとされる通念が形成された。そして、建築論においてコンテクストという用語は日常的に使われ、同時に、設計対象とコンテクストが「類似性」、「継続性」の関係をもつことを「コンテクステリアル」であるとして、その有無を評定する手法として建築批評が盛んに行われた。

しかし一方で、こうした通念とは別の解釈や、コンテクスチェリアリズムに対する否定的見解もあった。それら中、コンテクスチェリアリズムという用語の使用頻度は1986年頃以来にその後を減らす傾向が見られた。この傾向はボストン・モダニズム論の衰退、および1986年鉄道制覇改革法学などの政策転換に起因して歴史的環境保全建築が大幅に減少した動きに合っている。

3.1. 適応性と対応に基づくコンテクステリアル概念

コンテクスチームルであることを評定の基準とする場合、設計対象とコンテクストとの間に求められる「関係の形状」、「相続性」、「関係」に限らず、さらに拡張して規定する立場がある。

たとえば1998年、スミス（J. H. L. Smith Jr.）は、コンテクステリアルとしてデザインにおける「適応性」、「継続性」に関する概念であると述べている。スミスは、魅力的な大学キャンパスの建築事例には、学問の歴史的進展を反映する「アフィニティ」（「共通する起原からある密接な関係」という性質があることを指摘し、形態の類似性を求める単一のスタイルでデザインする態度が必ずしも適切ではないことを示唆している。

このほかに、方法概念としてのコンテクステリアル概念を記述する際に導入される概念として、先述の「応答」がある。認知科学の理論によれば、「応答」は設計対象のコンテクストから刺激を受けた設計手法としての反応である。前説の「適応性」とは、「応答」によって、設計対象とコンテクストの間に新たに生み出される「関係の形状」の許容範囲を定める概念であると考えることができる。
すなわち、「適切性」と「応答」という概念が導入されることにより、『類似性』『連続性』を求める通念としてはのコンテクステリアリズム観をを超えた根拠ある解説が生じたと考えることができる。

3.2. 通念としてのコンテクステリアリズム観に対する批判論

コンテクステリアリズムという用語が流行するのに同時に、Ⅲ期からⅨ期にかけてコンテクステリアリズムに関する多様な解釈が現れたが、それには即席の表現や批判があった。それらの否定的見解の論点は、大きく二つにわけることができる。

第一は、コンテクストという概念の意味が複雑である点に対する批判である。たとえば、1981年にビービー（T. Beeby）は、対象をとりまく環境に「コンテクスト不在」または「受け継ぐべきコンテクストが無いている」場合、コンテクステリアリズムは無力であるとの見解を示した

第二は、作品に対する批判である。たとえば1982年、建築家カーティス（W. J. R. Curtis）は、ロウの「クラスレーシテイ」が示した理論に基づく建築作品に対して「折衷主義と同じくならない」と述べた。さらに1983年には、コンテクステリアリズムは、環境保全主義者に逆行するもので、結果的には標的都市を観光地に扱う単なる産業となり、隣接する既存住民の感情的な模様に陥るとの批判を述べた。

ところで、この第一の批判論は、対象とする「環境」がひとまとめまりの明快な「構造 structure」をもつ存在であることを前提としており、実質的に対象自身の「構造」対象のコンテクスト」を同一視している。これは、コンテクストを知覚過程において対象の外を取り巻いているものと捉える、知覚過程に及ぼす効果に着目するコンテクスト観に異なる立場に立っている。

一方、第二の批判論は、コンテクストに捉えられる建築作品がとる設計手法が概念的形態学の引用に偏ることの指摘である。これは、形の意味を伝達することが設計の目的となる結果、建築表現が富厚な記号となり、建築が物他の本質的側面を象徴してまるデザインの傾向への異論であった。いわば、コンテクストに起因することを弁明しながら結果的には既存の模様に過ぎないデザインが横行することに対する異論である。

こうした批判論を従来通念としてのコンテクステリアリズム観を、心理学的観点からみることならば、そこに「ゲシュタルト法則Gestaltgesetz」に対する過応があると考えることができる。

すなわち、通念としてのコンテクステリアリズム観が形成される過程において、コンテクスト概念は「物理的コンテクスト／文化的コンテクスト」という二つの水準のうち後者に偏重して用いられるようになった。ところが、初頭のコンテクステリアリズムにおいてコアネルが適用した、ゲシュタルト法則は、元来が知覚過程において意味の問題を含まない（かつもform）の水準において有効であり、すべての認知過程において普遍的であることはできなかった。意味の問題を含む（shape）の水準においては必ずしも有効ではないのである。

しかし、それにもかかわらずコンテクステリアリズムと呼ばれる作品の中には、建築形態の（形式）の水準において自明的に「類似性」を追求した例があった。このような作は、設計者の意図に反して、観察者は模様として受け取り、あるいはその設計折勢を計画数数多数の住民意見にむやみに同調し、自治体や地域の全体にとって本当に必要なものを破壊する側面があると批判されたのだといえる。

3.11 ヨーロッパのコンテクステリアリズム観に対するコルネル派の反論

図8 333ノース・ミンダーガン・アヴェニューピルディング（設計：Holbird & Root，1972年とロンドン・ギャラリタスビルディング（設計：Arifd Alshuler，1972-23年）

70年代初頭以来、コアネル派の言説およびジェックス、スタークらによるポスト・モダン論流を否定して、コンテクステリアリズムという用語は、ヨーロッパにも普及した。

この動向を踏まえて1986年、レスニコスキー（W. Lesnikowski）らは、近世主義批判論以前の作例を基に、アメリカとヨーロッパに対照してコンテクステリアリズム概念を論じた。

レスニコスキーらは、アメリカでのコンテクステリアリズムはポスト・モダン建築化に表れており、都市ローマ欠を占める客を熱心に、近世世界にとって避けることのできない新技術fragmentationと「不安定さinstability」を容認していると述べた。一方、ヨーロッパでのコンテクステリアリズムには、政府による環境計画政策の強い関与があるとし、住居や事務所住民は標準的であるべきで、記念的な住民のみが特別な意味を持つものであるとした。K.クリエ（K. Krier）の主張などを引用した。

こうして、レスニコスキーらは、無干渉主義が有力になり全体論へ向かって満れている今日、広大な都市環境を再び可能にすることを支援するものとして、ヨーロッパにおけるコンテクステリアリズムの傾向を支持する姿勢を示した。

このレスニコスキーらのコンテクステリアリズム観に対しては、コアネル派のコンテクステリアリズムの命名者であるハートとコーニクリによる反論がある。

ハートです、コンテクステリアリズムは反全体論、反ユートピア主義の立場にあるもので、レスニコスキーらの例を挙げた。オースマンによるパリ改造は幾何学的秩序の理想を既存のコンテクストに無理強いした計画であり「コンテクステリアリズムな和解contextual accommodation」とは異なると主張した。

また、コーニクリは、レスニコスキーらは「コンテクステリアルな都市あるいは環境について語ること」と「コンテクステリアリズムという考え方」を混同しており、後のコンテクステリアリズム観は、単に「理想形ideal form」を押し付ける都市デザインの歴史を否定していると述べた。

1983年にコーニクリは、ヨーロッパでのL.クリエの主張に代表される、超高层建築を形成的都市を本質的にに対立しうるない建築形態としてはじめから排除しようとする理由に反対した。そして、シカ
の超高层建築を例として、個別に計画される複数の建築物が協調し合うことにより魅力的な都市空間を形成することができると主張したが、また「コンテクスト」の定義からして「コンテクストチュリアルであるということ」は、建築形状や都市形状に対して先行して提示（suggest）することができないと述べている。

このようにコーエンとハートは、注視する対象を取り込んでみるコンテクストと、コンテクストに先行して人の内面にあるスキーとしての「理想形」とを区別して認識している点は、レスニコウスキーとはコンテクスト観に相違があることがわかる。

3.4. コンテクストチュリアルズの近接概念と相違点
現代建築において、コンテクストチュリアルズという新興共産主義的なしばしば使用される用語に「地域主義」「歴史主義」「伝統主義」「大衆主義」がある。しかし、これらの概念とコンテクストチュリアルズとは、現代建築史にあって次のような類似点と相違点をもつ。

第一に、地域主義は、元々、グローバル様式あるいはインタラクションズ（国際主義）に対する概念で、限定した特定の空間領域としての地域の価値を志向する立場を指す。

ここで国際主義を全体論とする観点からみれば、全体論を示すという立場において地域主義とコンテクストチュリアルズは共通する。しかし、建築における地域主義は、特定の地域的価値を志向し、地域に分布する典型的か特異化し用いられる立場を示す。これに対して、コンテクストチュリアルズの立場は、先に述べたように、引用において幅広い応答を許容する点で、地域主義とは異なっている。

第二に、都市の近接や周辺に建つ「歴史的」建造物との類似性を求める方法に基づく建築作品とコンテクストチュリアルズと呼び、これは歴史主義と同義とみなす見解がある。しかし、歴史主義の建築は「歴史のなるもの」に着目し、その方法を時間位相における過去からの引用に限る。これに対して、コンテクストチュリアルズの立場は、過去・現在・未来からの引用を容認する点で異なっている。

第三に、「新歴史主義 neo-traditionalism」あるいは「新伝統主義の都市建築 neo-traditional urbanism」と呼ばれる概念に基づき、80年代以降多くの事例がある。郊外住宅開発の「The Traditional Neighborhood Development」とコンテクストチュリアルズを同義とする見解がある。

TNDは、第二次大戦以前のアメリカにおいて一般的であった「伝統の近隣 traditional neighborhood」を現代化することを目的とし、コード the Codesと呼ばれる、協定に基づく形態規制を適用する。また、既存市街地においても、周辺の建築形態と類の関係をつくることにより強制あるいは推奨する傾向を示すデザインコード design code（設計規準）などの建築規準を導入することを目的とし、「コード the Codes」と呼ばれる、協定に基づく形態規制を適用する。また、既存市街地においても、周辺の建築形態と類の関係をつくることにより強制あるいは推奨する傾向を示すデザインコード design code（設計規準）などの建築規準を導入することを目的とする。
様々な客観的視点、時間視点における人工環境の構築が必要とされる今国の社会において、「動的なコンテクスト観」の見地のもと、コンテクスト概念を再認識し、建築の設計過程におけるその役割を重視することは十分に意義があると思われる。

そして、そのような理解のもとにおいて、「歴史」「伝統」という概念も創出上有効に用いることが可能になると思える。

謝辞
本研究の過程で、コレハル大学、D.スタジオにおいてロウから直接指導を受けた経験をもつ建築家、三木誠氏から貴重な情報をいただきました。林光氏には資料収集に協力を得ました。ここにあらためて感謝いたします。

注
秋元氏は1980年代前半の北欧建築思潮におけるコンテクスト概念大建築歴史におけるコンテクスト概念の建築学における「コンテクストコンセプトズ」の研究、その1、日本建築学会計画論文集、第62号、1982年2月、pp.296-297、p.300

森では所ロウやのコンテクスト概念大法において、及ぶ後世の研究者である（著者）ウェルス、Dennis、T.シュマッシャー、F.コートナー、S.コーン、S.ホリト、S.ポーター等の建築家、論文家を指す。


Koetter、F. Notes on the Between、The Harvard Architecture Review、Vol.1、1980、pp.62-74


1975年には、ヨーロッパ建築学、その都市学、東京、筑波大学園都市計画、東京、建築学東京2000年等の活動があった。

ボストン・モーレンの研究の関係は、歴史的建築物保存活動の歴史的活動に富んでいる（Lewis、H. and O'Connor、J. Philip Johnson、The Architectural History在他的Own Orders、Rizzoli、1994年、p.150）

Cohen、S. Physical Context / Cultural Context: Including it all、Oppositions、No.1、1974、pp.1-40（後審議局、物理的コンテクスト/文化的コンテクスト、八東が立、建築の文脈都市の文化、筑波出版、1979年所収）

すでに1967年以降、オーウト、C. W. Moore、スコーンは新世代の建築家と近代主義者である新世代建築家、数的相対性の概念を用いて、旧世代のモーレンの著作の「less is more」と比較される「木製の自然な光」を求める態度を「従従的」と呼び、新しい概念を特徴づけ、いわゆる建築家を形成する目的を図っていた（R. Kasparian、F.コートナー、F.オルトマン）

この図形（コント）とは、新世代の建築家、スタジオ、ボストン、コンテクストとしての建築家、スタジオの研究者、アーケード研究者と「クラブ」、「アーティスト」、フレーム、「ブレック」に名付けられている（岡本夏木、藤村明月、村上隆、監修）、建築学、ストックホルム、心、1995年）

建築学の理論によれば、人間の知識過程における都市と文化は相対的な関係であり、理解の過程では絶えず「文化的な補完」や「新たな文化の生成」が生じているともとられる（佐伯邦雄、建築と理解、東京大学出版会、1982年、pp.75）

注1same、建築家、建築家学の初井光氏、ビルト・ハウス集合住宅の外見全体が、設計者が破壊する近代建築を示すという点で、同じ建築家（井上光氏、建築、今治市、講座美学、芸術の都、東京大学出版会、p.327）

注2歴史とは、ギュスタフ・ボンヌルの言葉で、全てのうち一つから一つが他の部分から離れて無独有偶のままであることを意味する（曹雪芹著、岩波心理研究、岩波書店、1974年）

注3秋元、前掲論文、Between culture and context、PA、1974、12 p.55など1974年頃で景やにして答かされている中で「コンテクスト」の使用例は急増している。


Rowe、C. and Koetter、F. op.cit、pp.95、104、106、116、121、125、144（佐倉訳、「建築と環境、pp.153、158、158、181、188、189、194、201、229、230）

ロウは、ローレの次の著作に示される思想を参照したLogik der Puscheung、1934；The Log of Scientific Discovery、1950；The Open Society and Its Enemies、1950；The Poverty of Historicism、1957（Rowe、C. and Koetter、F. op.cit、p.95）、Utopia and Violence、1974；Towards a Rational Theory of Tradition、1948；Conjectures and Refutations、1962（Rowe、C. and Koetter、F. op.cit、p.121）

ポルティコ学の延繰研究における反論可能なテーマ、および帰納主義的科学における仮説的学術として知られるが、その結果に従う批判的合理的に知的科学の理論における変形であった。この精神は、歴史主義仮説を通じて全体持向への反論と帰納主義社会学の挑戦に結びつく。そのフィクションが三世紀間における観察的知識の発展にも寄与している（今村有司、現代的思潮を読む、講談社、1988年、pp.795）

Rowe、C. and Koetter、F. op.cit、pp.87、91、93（筑波訳、旧建築学会、pp.139、148、143）・ロウは、仮説的存在を常に許容する多分な民主主義の重要性を強調し、協議と論争を通じて多様な民主主義的重要性を示した（山内功、アイザイア・パーソン、二十世紀の対立、講談社、1988年、pp.334）

秋元、前掲論文、3.3 ロウのユーリダ主義批判論

elijke、バーリン、河合和訳、ハーバート・ハマークと孤立：「挑戦と平和」の歴史哲学、岩波書店、1979年（棚原出版1953年）、pp.7

Rowe、C. and Koetter、F. op.cit、p.91


コンテクスト効果は、文字における「詩的掟poetic function」や深層における「病化構築revolutionizing effect」にも通じる知覚象とされている（歴史主義の基盤エロティックの伝統性、英米文化と大きく影響力があった（平井政規、20世紀英文学研究1983年、東京帝国）

Eliot、T. S.；Tradition and the Individual Talent、Perspecta、No.19、1950、pp.36-42、1982（利用1919年）（平井訳）伝統と個の才能世界批評系31―「伝統の展開、筑摩文庫、1976年、pp.216-224

したがって、フォルムもまた「ネオ」型の性質を持つ人としてエロティックをあげている。一方、過去に対して対立する態度をもつ「古典的」仮説とし、「エリオト」、ミーラー、E.フック、E.ライジー、E.ブルース、E.ルルス、E.マティ文学の編集にあたった（R. Venturi、C. Koetter、F. op.cit、p.92、127）

パンヴァロの歴史的考察は「過去」「歴史」「伝統」という言葉を用いた、先人が既に構築され、新しい時代において再構築される可能性を示すと解釈できる。「C. 佐倉、竹山実登、ポストモダン建築の建築言語、エアードユーロ、1982年（岩波文庫1979年）

森田、竹山実登、ポストモダン建築の建築言語、エアードユーロ、1982年（岩波文庫1979年）

建築学界の問題として諸元問題に意識を向けたことは、建築を、普通化しきる社会」とする意にであった

C. 佐倉、<前掲論文、pp.89>